



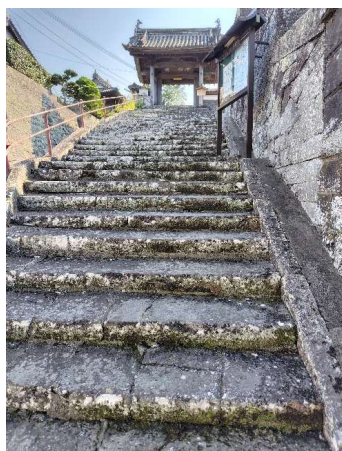
うすき祈りの回廊『私の押し風景(石段)ベスト 7』

板井なほ子さん（祈りの回廊ガイド）選出



①卯寅口門脇櫓の石段

白杵公園の北東に位置する卯寅稲荷神社。港町商店街へ降りていく石段には朱の鳥居のトンネルが下まで続く。その中ほどに卯寅口門脇櫓に向かう石段がある。櫓は重箱作りという形式で江戸時代に建てられており、全国で3つしか現存していない貴重な櫓だ。この石段も同じ時間が流れており歴史が感じられる。櫓、朱の鳥居、黒の石段が組み合わさるベストポジションを探して思い出の1枚にしてみよう。



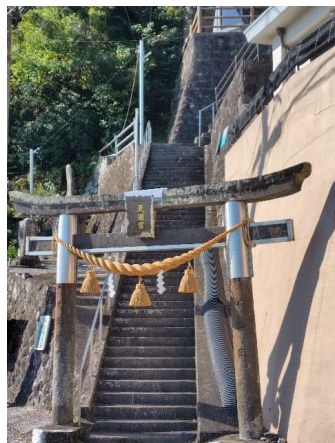
②多福寺の石段

稲葉藩主の奥方寺と知られる多福寺は江戸時代創建のお寺。寺に上がるには緩やかな坂道が整備されている。その横に歴史を感じさせる昔ながらの石段がある。この石段の良さが最もよく伝わるのが竹宵。竹宵は毎年11月の最初の土日に行なわれる夜のイベント。町中の至る所に竹ばんぼりや工夫を凝らした竹のオブジェが並び般若姫行列もある。その中で、竹宵の宣伝ポスターにもなるのがここ多福寺の41段を埋め尽くす竹ばんぼりだ。闇の中に浮かび上がる美しさは圧巻、必見だ。間近で見るとよし、遠くから見るとよし。言葉では表現しきれない感動が味わえるはずだ。



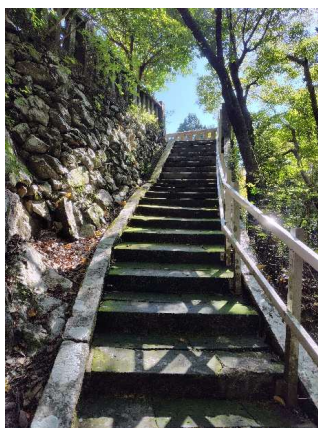
③法音寺の石段

お寺では珍しい石造りの門をくぐると目の前に石段が現れる。整備を終えてそう時間が経っていないためまだ新しい。古い山門とのギャップは否めないが、お寺自体も新しくなっているので一体感はある。石段を上りきったら振り返って欲しい。建物の間からお城の大門櫓が見える。この山門からお城は鬼門の方角にある。鬼門は邪悪なものが入ってくる方角。山門に鎮座している2体の仏は時国天と毘沙門天。彼らはお城を守るガードマン。邪悪なものがお城に入らないようにここからしっかりと見張っている。2体の間に立てば、さあ、あなたもガードマンの仲間入り。



④中津浦天満宮の石段

漁港に車を止めるとすぐに鳥居が目に入る。そこから斜面にへばりつくように石段は上へと続いている。途中で右に折れるが、折れた石段の先は遮るものが何もなく、ただ大空がどこまでも広がる。快晴であれば真っ青な空だ。石段は天国へと続く階段のようだ。江戸時代にはスペインの船、サンタ・アナ号が修理のために8カ月間ここに留まっていたという。その間地域の人々と天国の話をしていただかもしれない。スタンプが置かれた場所からの白杵湾の眺めは最高だ。沖に見える2つの島は地無垢島と沖無垢島。時間が合えば、白杵と八幡浜を結ぶフェリーの航行も見ることができる。港の風景はこの石段なくしては楽しめない。



⑤白馬溪の石段

江戸時代に大流行したお伊勢参り。多い時は年間800万人の人が伊勢神宮を訪れたという。しかし、当時伊勢に行くのは時間もお金もかかり、とても難しいことだった。白馬溪は伊勢に行きたくても行けない白杵の人たちのために、地元でお伊勢参りができるように、地元の商人が外宮の神である豊受大神をお迎えして参道を整えた場所だ。伊勢地方に縁のある名前が付けられた8つの橋を渡り終えると最後の難所が待っている。石段だ。ここまでの標高差はなんと約50。もうひと頑張り。登り切ると白杵版伊勢神宮である大神宮に到着。伊勢神宮に詣でる喜びを抱いて、昔の人たちはきつとこの石段を登っていったに違いない。



⑥日吉社の石段

日吉社へのお参りは通常山王山石仏横の坂道を登っていく。しかし、この石段こそが本来の参道なのだ。太古から手つかずのコジイの森の中へ、あまり広くはない石段が上へと伸びている。普段は見過ごされてしまいがちだが、春・秋の大祭や年末には違う姿を見せる。特に大晦日はこの地域の年越し行事が日吉社で行なわれるので、石段を上ってくる人の足元を照らすために灯りが準備される。日吉社は昔も今も人々に大切にされている神社なのだ。



うすき祈りの回廊『私の推し風景(石段)ベスト7』

板井なほ子さん（祈りの回廊ガイド）選出



⑦水地天満宮の石段

静かな田園風景の中にある水地天満宮。創建は西暦923年ととても古く、建物だけでなく、石段にもその長い歴史を感じることができる。近くにある九重塔や金明孟宗竹などと合わせてこの地域ならではの風景だ。石段の傍には地酒の名前になるほど親しまれている潜龍梅の説明書きがあるが、これが実に石段とマッチしている。ゆえに、わずか8段の苔むした石段だが、ここはよりゆっくりと歩を進めたい。先には2対が待っている。長い歴史、地域の人々の信仰に思いを巡らせながら狛犬たちの間を抜け、本殿を参拝すれば心が洗われることだろう。